

日本庭園史の研究について

(株)加納造園・代表取締役・加納一弘は、日本庭園における江戸時代末期の造園技術書『築山庭造伝』に関する研究論文を2018年3月京都造形芸術大学に提出しました。

日本人は、自然の中に四季の変化を感じ取り、季節を知ることで生活の中にさまざまな文化を取り入れてきたのである。

日本庭園も四季の自然を素材として、自然風景を課題とする創作芸術であり、日本文化のひとつである。日本庭園は、どの時代においても自然を意識し、自然をテーマとして創られてきたのである。庭園という限られた空間構成の中に、作庭者の感性と美意識により創造されてきたが芸術である。日本庭園は、立地環境やそれぞれの時代の文化的状況を色濃く反映してきた「人と自然の共同作品」である。日本庭園の歴史を創ってきたのは紛れもなく「人と自然」である。

(論文前文より)

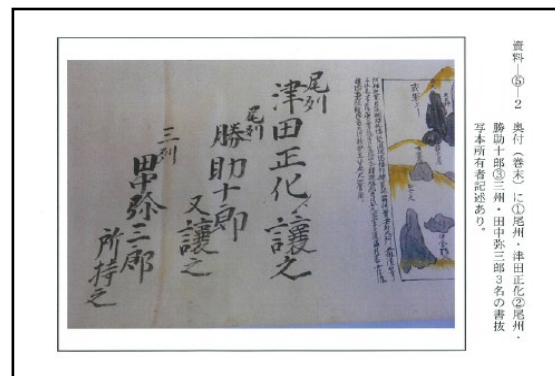
(株)加納造園は、日本文化のひとつである「日本庭園」の歴史遺産を検証し、それぞれの時代において日本庭園に歴史・文化・人々がどのように関わり、現代の日本庭園の作風に生かされてきたかを知ることは、造園という日本文化を生業(なりわい)とする者にとって必要なことであると思われる。

(株)加納造園所蔵の江戸時代末期(天保年間)の「築山庭造伝(前編)(北村援琴一著述・享保20年(1735)一刊行)より書抜されたとされる卷子(かんす)。



(株)加納造園所蔵の三河に伝わる

①江戸・天保年間に「築山庭造伝(前編)」より書抜きされた写本。

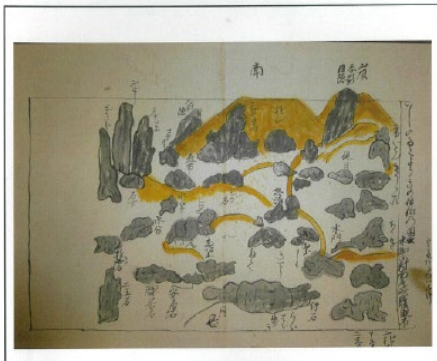


奥付(巻末)に尾州津田正化

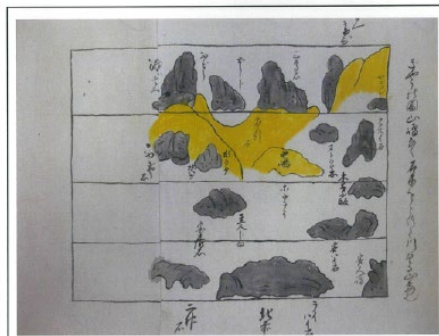
②尾州・勝助十郎 ③三州・田中弥三郎の3名の写本所有者記述あり。



③書拔による写本(卷子)全景
(当社卷子仕立)



絵図資料 ④「石の立様木の様の事」



絵図資料 ⑤「滝福の事」「滝口の事」「河守の事」「三石の事」「客人島の石の事」「主人島の石の事」「礼拝石の事」

④卷子絵図資料「石の立様木の様の事」(着色有)

⑤卷子絵図資料「滝福の事」他(着色有)

榊加納造園所蔵の「築山庭造伝(前編・後編)刊行本」

著述-北村援琴・発行-建築書院・発行日-大正7年(1918年)



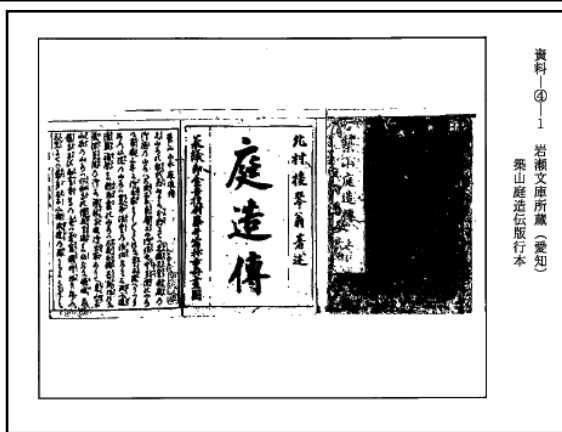
資料①「築山庭造伝(前編・後編)刊行本」
著述-北村援琴
発行-建築書院
発行日-大正七年(一九一八)

全-6冊



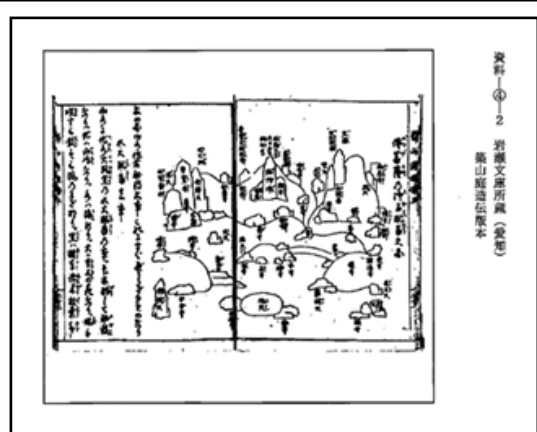
資料②「築山庭造伝(前編・後編)刊行本」

裏面部分



資料①-1 岩瀬文庫所蔵(愛知)
築山庭造伝版行本

①岩瀬文庫(愛知)所蔵本



資料①-2 岩瀬文庫所蔵(愛知)
築山庭造伝版行本

②岩瀬文庫(愛知)所蔵本

国指定名勝「伊藤氏庭園」

所在地：福井県南条郡南越前町瀬戸 29-2

指定日：昭和7年4月19日

指定面積：363 m²

庭園様式：築山林泉式庭園

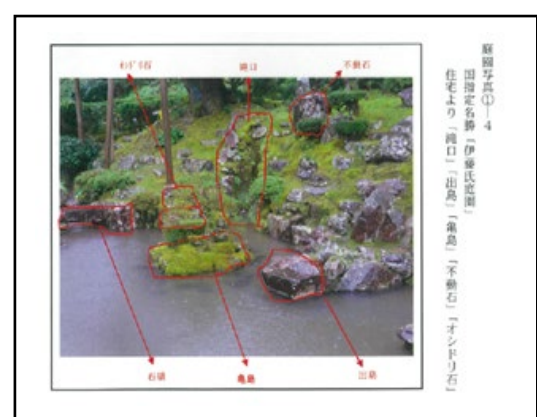
作庭年代：江戸時代中期

「伊藤氏庭園」は江戸時代中期から後期にかけて集大成された「築山庭造伝」を基に医業を営む伊藤家により作庭されて庭園である。



庭園写真①-3
国指定名勝「伊藤氏庭園」
冠木門入口よりの庭園全景

「伊藤氏庭園」一冠木門入口より庭園全景



庭園写真①-4
国指定名勝「伊藤氏庭園」
住宅より「滝口」「出島」「不動石」「オシドリ石」

「伊藤氏庭園」一住宅よりの「滝口」
「出島」「不動石」

※国指定名勝「伊藤氏庭園」については「国指定データベース・伊藤氏庭園」南越前町ホームページをご覧ください。

以上、当社所蔵の古文書と「伊藤氏庭園」等東海・北陸地方の作庭事例を検証し、論文『江戸議題末期の庭づくりのバイブル書「築山庭造伝」が地方の庭園文化に与え影響について』をまとめました。今後、江戸時代末期の東海・北陸の日本庭園の作庭文化が近代の日本庭園の作庭技法にどのような影響を及ぼしたかを検証し、当社の今後の日本庭園の作庭技術に生かすことを考えます。

以下論文『江戸時代末期の庭づくりのバイブル書－「築山庭造伝」が地方の庭園文化に与えた影響について－』要約をご一読ください。

江戸時代末期の庭づくりのバイブル書

『築山庭造伝』が地方の庭園文化に与えた影響について

日本人は、自然の中に四季を感じ取り、季節を知ることで生活の中にもさまざまな文化を取り入れてきたのである。日本庭園も四季の自然を素材として樹木草花を題材とする創作芸術であり、日本文化のひとつである。日本庭園は、この時代においても自然を賛揚し、自然をテーマとして語られてきたのである。庭園という閑れた空間構成の中に、作庭者の感性と美意識により創造された多岐な造景である。一方、時代によつて変化してきた自然の題材と作庭者の表現方法は、日本庭園の流行を測りあげたのである。その流行は、江戸時代には何に反映していたのか。江戸時代末期になると日本庭園の技法はマンネリ化し、多様な自然感が表現されなくなる。何か終末感のようになり、あるがままの自然というよりも技巧的な自然になってしまったのであると論じられるようになった。このことが、『築山庭造伝』つきやまでいぞうてん(以下『築山』)の流行と重要な語らばいさるをめぐり、当時の議論となるのである。

『築山庭造伝』(前編)は、享保三〇年(一七三三)北村操等(きたむらえん)によって刊行された作庭技術書である。『築山庭造伝』(後編)は、拙著な庭園書として日本庭園と書かれる『作庭記』(以下『作庭』)から約五〇年あまり後に刊行された庭園の作庭書である。『作庭記』以後にも多数の作庭書が刊行されたが、それらは秘伝書であり読者の間に読まれるというものではなかったのである。江戸時代末期の天下太平の時代における印刷技術、紙質の向上により、北村操等が刊行した『築山庭造伝』(前編)は、作庭の基本となる考え方や具体的な技法まで地方を含め読者の間に届くべく庭づくりのバイブル書として編まれたのである。

現在、『築山庭造伝』(前編)の複製写本が、唯一、京都

大学に『庭造伝書技法』(藤永光亨「抄」)として残されている。『築山』(前編)は、名古屋市中区(藤永文庫)・愛知県西尾市(岩瀬文庫)など全国の図書館等に所蔵され、地方において広く日本庭園の作庭技術のバイブル書として読者の間で愛読されてきたことを知る事ができるのである。後世『築山庭造伝』(前編)については、遊園家・重藤三善(しげもり)みれい氏は、作庭の技法も定量化し、精細において江戸時代末期の作庭を論じたものとしたと論じている。一方で、林学博士・上原俊三氏は、『築山』(前編)に記述されているが、定量化されたのも時代の弊である。定量化理論が先行し、その過程で定型技法が発達し、さらに型を極めた庭園が生まれるのである。上原氏は、定量化されたこそ、次に新たな優れた庭園が生まれたのであると論じている。江戸時代末期の日本庭園の作庭技術に繋がる論議は、『定量化』が議論のキミワードとなっているのである。

そのようなか『築山庭造伝』(前編)の一番書抜写本が三河地方(愛知)にも現存していたのである。三河地方に伝わる書抜写本の特色は二点ある。一つは「石組の事」を中心に、北村操等の原稿写本の中後部分を書抜写本しているが、岩瀬彦色(彦色)図には、北村本に存在しない部分があることである。その背景には書写した人物が、石組に対する知識も深く、一定の造園技術をもっていたことを示唆する。このことは『築山庭造伝』(前編)が広く地方においても作庭者に興味をもたれ、作庭技術の基本となつていったことを示唆する。更にわかりやすく書抜写本を作成したことには、三河はもとより、各地で庭園への関心が高かったことを示す史料として貴重である。

本研究では、実際の庭園事例をもとに、『築山庭造伝』

の影響の有無について検討した。例えば、江戸時代中期から後期にかけて『築山庭造伝』を基に作庭されたといわれる福井県奥平郡越前町の閑庭名所「伊藤氏庭園」がある。『伊藤氏庭園』は住宅庭園であるが『築山庭造伝』の庭園図本に記述して石組みを中心にするに作庭されている。『築山庭造伝』から、日本庭園がもつ精神性や宗教的革新を参考に作庭された池泉庭園式庭園である。江戸時代末期の庭づくりのバイブル書『築山庭造伝』が地方の庭園文化に多大な影響を与えていた作庭例である。

『築山庭造伝』の書抜写本の現存する尾張・三河地方の庭園から「内々(うちうち)」「神枝(かみえだ)」「愛知・春日井市」と「鶴光(つるみつ)」「庭園」(愛知・新城市)を「伊藤氏庭園」の配石図を参考に設置すると、『築山庭造伝』を庭づくりのバイブル書として作庭したという史実はないが、池泉まわりの石組・配石など庭園の作庭・後継にあたり、『築山庭造伝』を参考にすることは可能性が示唆される。

このように、『築山庭造伝』(前編)が版刻本として出されたことにより広く地方の作庭者に読まれ、庭づくりの「定量化」が進まうたことも事実である。その庭園技法の「定量化」を決して肯定するものではない。江戸時代末期、日本文化のひとつ『日本庭園』が広く地方においても知られるようになったことは、『築山庭造伝』(前編)が与えた影響は大きく、その後の日本庭園のデザイン、技法への発端にもつなぐたことと考えられるのである。